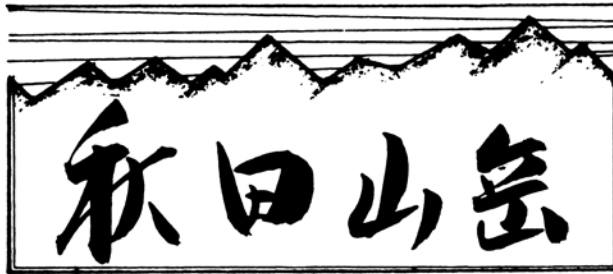


2020



令和2年2月 発行

No. 115

社団法人 日本山岳会秋田支部

秋田市泉菅野  
1-2-14 鈴木方

TEL・FAX018(823)2708

発行 秋田支部  
編集 鈴木裕子

## 秋の里山山行

### 修験の山・金峰山(鶴岡市) ～ 川口廣志

十月一日(火)、御所野シルバーエリアに参加者十名が集合し、三台の車に分乗し、山形県鶴岡市の金峰山登山口の青龍寺に向かう。青龍寺からさらに車道を金峰山・中ノ宮遥拝所の駐車場に着く。ここからの登りとなる。

社務所の前に小さな祠があり、その傍らにある山形名水百選の「開伽井(あかり)の清水」で喉を潤し、身を清めて、九時三十分には杉並木の階段を登ると申の宮(如意輪観音堂)の前に出て、ここから尾根の登りとなる。緩い勾配が続くが流水で深くえぐられていて歩きにくい。所々にあるお堂を参拝しながら登って行くと八景台に着き、母狩山が良く見える。ここからすぐの女人結界をくぐると急な登りとなるが、山頂が近くにつれて参道らしく緩やかになる。やがて母狩山への縦走路分岐に着くと、目の前に金峰山山頂本殿(蔵王権現堂)が鎮座している山頂(四七一m)に着く。国の重要文化財である本殿は現在修理中で、立ち入り禁止となっていた。

少し下って三角点のある北側の展望所で鶴岡市内を眺める。地面は水分を含んでいて滑りやすく、注意しながら八景台に戻り、昼食とする。弁当を広げたところに思わぬお客様が現れた。一匹のスズメバチがコップの縁を回遊し、食べ物を取りを飛び回って、落ちて食べて食べられない。早々に下山し、ゆっくりと下山しながら、途中の石碑や修行の滝場を巡りながら中ノ宮に

到着。ここで一応解散とし、温泉班と寺社探訪班に分かれた。寺社探訪班七名は、青龍寺、天澤寺、南州神社を訪ねることにした。

金峰山は国の名勝であり、古くは蓮華峰、のち八葉山と称したが、承暦年間(一七〇七～一八一)に吉野の金峰山蔵王権現を勧請してから金峰山と改め、以来修験の山として勢力を伸ばしたとされている。まだ死霊が籠る山として信仰を集め、青龍寺からの参道沿いには八五六墓の供養碑、墓碑が林立している、日中でも背筋がゾクゾクする。

次に、すぐ近く为天澤寺と丸岡城跡を散策。天澤寺にある加藤清正の菩提を弔う清正閣と加藤家関係の遺跡を見学の後、酒田市にある南州神社へ。

酒田市に向かう途中、石川委員の提案で巨木を見学。鶴岡市の国指定天然記念物「文下(ほうだし)のケヤキ」は、根回り一m、高さ二八m、樹齢約八百年から九百年推定と記載されていた。次は、酒田市の「山楯のケヤキ」、こちらも樹齢八百年と推定と記載されていた。堂々とした風格の古木であった。

西郷隆盛を祀る南州神社は、酒田市の土門記念館の東側にある。神社に参拝してから会館で西郷さんの遺墨及び資料の説明を受けた。

最後に、二等三角点のある飯森山(四一・八m)に登る。飯森山公園駐車場から舗装された歩道を十分程着いた標石には「一九二八年に大陸移動説を検証するための経緯観測点として、

飯森山、飛鳥、三崎山の三点に設けられたものの一つ」と記載されていた。ここで探訪は終了し、帰路について。

参加者 鈴木裕子 柳田勇悦  
佐藤博 石川祐子 熊谷光子  
三浦昭男 川口廣志  
会員外 柳田レイ子 時田慎一  
進藤繁雄



山頂にある蔵王権現堂前で

### 佐藤博会員

#### 「東北百名山」登頂終える

佐藤博会員は、八月二十五日、山形県の小又山に登頂し、東北写真家集団編の「東北百名山」新旧併せて、百十六座の登頂を終えました。

おめでとうございます。

※目標の山々を登頂した会員は事務局にお知らせください。会員にお知らせしたいと思います。

太平山歩道整備に参加して

三浦昭男

十一月二日(土)、整備予定箇所は中岳、心配された天気も薄日射す最良のコンディション、八時前には、参加者全員二手の又集合。草刈機の操作は佐藤博委員と安藤委員による二台での作業に決まり、早速の機械点検、エンジン始動し快適な動作状況を確認した後、支部長から安全作業の指呼のもと、予定時刻八時に出発。

登り始めから急坂で、草刈機の担ぎ上げだけでも大変な労力だが淡々と(本当は大変だったと思われるが)、さすがベテラン、年齢のギャップは見受けられない。休憩をとりながらひたすら標高を稼ぎ前岳は、八時四十五分着。前岳では頂上付近の歩道上にブナの倒木が、また、休憩用ベンチが不安定な状況にあり、帰路に手当てすることにし、一路中岳へ。

三角井戸の上方、ガレ場を登り切ったところからは、やはり笹竹や草が繁茂しており、ここからがまさに整備予定の箇所、本番の草刈りをする。草刈機の高いエンジン音を唸らせ作業開始、他の者は刈草の払い寄せをしながら、休むことなく中岳の頂上まで進み、また、中岳山頂は特に念入りな刈り払いをし、当初目標の歩道整備作業は十二時きっかりに終え、昼食休憩。休憩後、残りの作業に向け下山開始、前岳の倒木処理を鎌田さん、安藤さんが伐採、ベンチの修復、そして女人堂平場の刈り払いを済ませる。これで全

ての作業は完了し下山の徒に。二手の又には午後二時半無事到着した。



刈り払われて綺麗になった神社前の広場で

作業は安全に、順調にできたと思います。中岳山頂南側の支障木を処理し、眺望が開け、歩き易い歩道と、爽やかな山頂(中岳・女人堂)の平場が確保された。

草刈り中には往來の一般登山者からねぎらいの言葉を受けてました。紅葉は木曾石分岐から前岳にかけて綺麗で、見頃だったと思います。草刈機操作は危険を伴う重労働、世交代ができればと思います。

- 参加者 佐々木民秀、鈴木裕子、鎌田倫夫、佐藤博、石川祐子、安藤金栄、三浦昭男、中央地区山岳協議会、畠山秀雄

支部設立六十周年記念事業 御芳志及び負担金追加者

- 三千元 三浦俊雄 佐藤安弘、山川博

東北・北海道地区集会

今野昌雄

令和元年十月五日(土)〜六日(日)、蔵王町遠刈田温泉で宮城蔵王古道を会場に開催された。

東北、北海道支部会員を中心に約七〇名の参加者だった。秋田支部からは六名が参加した。

五日午後受付、支部長会議、全体会議、記念講演、懇親会、二次会と進んだ。蔵王町教育委員会社教主事・佐藤洋一氏の「蔵王の信仰の歴史と蔵王古道」の講演は資料と共に、蔵王信仰の歴史の概要と蔵王火山や噴火について語られ、私には貴重な蔵王の文化に接する機会となった。

蔵王には、平成二年のインターハイはじめ、冬の東北高体連顧問研修会で吹雪の刈田岳登山、ミニ団体やスキーでの宮城蔵王や刈田岳、山形県側スキー場(裏や表の呼び方なし)等々登ったり滑ったりすることはあった。

楽しい懇親会は、地元蔵王町長から歓迎の言葉を戴き、各支部からは「地元ソング」が披露され、宮城支部の合唱「蔵王のうた」も以前教えてもらったことがあり、懐かしくなった。

秋田支部では声高らかに「県民歌」を歌った。堀井副支部長のハーモニカ演奏も好評だった。

六日の山行には、遠刈田温泉大鳥居から刈田山頂コース(七時間)に鎌田、三浦、今野、澄川から刈田山頂(四時間)に鈴木、堀井、大船が参加した。

朝七時十分出発時は雨、八時にはカッパを脱ぐ、その後天候は回復。私達の先達は蔵王古道の会員・三島進氏で、宮城植物の会員でもある方で、コース中の植物を解説し、楽しませてくれた。

賽の碩古道入口でB班と合流。賽の碩を歩き、エコーラインを横断、三途の川を渡り、駒草平に着く。大黒天、浄土口から石段の道を登り、紅葉を見ながら登って行くうちに「蔵王大権現奥宮」の建つ山頂に着く。「お釜」もきれいに見え、秋田メンバーで記念撮影の後、バスでエコーラインを通り、遠刈田温泉へ。十四時五分に解散となった。

令和二年度の集会は青森支部担当で「階上岳」に決まった。楽しみにしています。



賽の碩古道入口で



- 参加者 今野昌雄、鈴木裕子、鎌田倫夫、堀井弘、大船武彦、三浦昭男

# 追悼 佐藤昭義氏を偲んで 大橋忠雄

佐藤 昭義 氏

昭和十四年六月八日生  
昭和四十四年一月 日本山岳会入会  
会員No.六六四三

紹介者 岡田光行氏 長岩嘉悦氏

昭和六十二年〜平成十年 委員

平成十三年〜十六年 副支部長

平成十七年〜三十年 顧問

平成三十年 永年会員

平成三十一年四月三日逝去 享年八十歳

佐藤昭義さんは秋田経済法科大学園岳友会の創立メンバーである。かけがえない先輩を失い、残念で、さみしくなりません。

以前は学生諸君やOB、それに土肥岳友会顧問と一緒に、昭義さんの自宅でテントを張り、宴会を開いて山の四方山話で盛り上がったものだった。思い返せば、私が大学三年の冬、山岳部で太平山の冬山合宿を計画した。当日はあいにくの雨であったが、色々準備もしていたので、とにかく野田の登山口まで行くことにした。雨は降り止まず登山は中止。その後、部員のアパートで残念会を開いた思い出がある。それからしばらくして昭義さんに逢う機会があり、冬山合宿の顛末を話した時、黙って私の手を握り、微笑んでくれた。その時の印象は深く私の心に残り、山の何たるかを知っている人の

対応は、今思い返しても心が温まる。社会人になり、仕事に追われて生きるのに忙しく山を忘れていたが、平成七年に再び山に登ることが出来るようになって、佐藤兼治さんや諸先輩、時には現役の登山部員と一緒に登ることもあった。



その頃は「千支の山」登山を行っていて、それに因んだ山が岩手県の「卯子西山(うねとりさん)424・2m」へ、その年の大みそかに兼治さんと昭義さんを私の車に乗せてその山を目指した。道路は盛岡を過ぎると凍っており、「卯子西山」の麓に到着した時はほつとした。

昭義さんは腰を痛めていて山に登れる状態ではなく、三〇m程歩く腰を降ろし、仰向けに寝るようにして腰を伸ばし、又歩くというのを繰り返して、何とか頂上に着き、無事に登山口まで戻ってきた。私と兼治さんは先に下山

し、テントを張って待っていた。今思えば、チベットの巡礼の五体投地のようなものであり、その執念に感服した。次の日、海岸にテントを張り、新年のご来光を拝んだ。私にとつて初めての太平洋のご来光であった。

昭義さんと兼治さんがだいたいぶ前に、太平洋の海岸にテントを張り、焚火で暖を取っていたら、ご来光を拝みに来た女性が現れて会話が弾んだそうだ。平成九年十一月に山形県の日本国登山の時はまた元気で歩ける状態で、我々と一緒に登って、その女性の名「賀世」と叫ぶ声を耳にしたが、それを聞いたことのある古い会員は多いと思う。山頂でよく焚火を楽しみ、イノシシ

岳でも焚火をした。木が湿っていても火を起さず「えぶす」ことが出来た。西堀榮三郎氏が大好きで、遊びに行くと西堀氏の話を持ち出し、「先に何が あるかわがらねーが行くのだ」だから良いのだ、それが面白い、を繰り返していたが、足腰が思うようにならず、冒険の夢を見ていたのかも知れない。

若いころは奥さんと共に炭焼きをしていて、大変な重労働で腰を痛めたのかもしれない。そして、俺は本当の百姓だ、田圃に肥を馬で運び、働いたと言っていた。大きな作業小屋と自宅を焼失して、一人暮らしになってからは、長い時間をかけて庭を造り、裏山に滝を作り、ナメコも栽培していた。

晩年、兼治さんを亡くし、仏壇に向かい、お神酒を挙げて、「まず、かじれ」と言う、二人だけに通じる言葉であった。昭義さんのお墓は補陀寺にあり、傍らには、兼治さんのお墓もある。

(合掌)

# 岳人・昭義さんを偲ぶ 佐々木 民 秀

何時も笑顔を決やさず、特に人望の厚い佐藤昭義さんが残念ながら逝ってしまった。

昭義さんは、持病の腰痛で登山の実践から遠ざかっていたが、山に対する情熱は人一倍強く、不慮の火災やその後の闘病生活などにもめげず、最後までその情熱を持ち続けていた。

旧経法大学園岳友会を、師事する佐藤兼治さん(故人第四代支部長)と共に創設され、同会の重鎮として永年に渡って貢献。

また、秋田支部への思いと支援を長く続けられ、特に小生が支部長時代には、副支部長として大いに力添えを頂いた。感謝申し上げたい。

昭義さんは、早くから「千支の山」や「ゴロ合わせの山」を選び、県北部の大吠山や天上倉山等の藪山を選び、仲間と共に登り、楽しんで、新築された自宅居間を山小屋風とし、ザイルなど登山用具を飾って山仲間と山談義するのを楽しみにしていたようである。平成三十年には、本会の永年会員に推挙され、そのことを入院先の病室でお知らせしたところ、「山の神様のお陰」と大いに喜んで頂いた。

あの笑顔、また、過去には鶴の湯温泉での有名俳優のロケ中、何も知らずに混浴したあの姿が目につかぶ。

今頃は、先に逝った師匠・兼さんと一升瓶を立て、山談義に耽っているのかもしれない。ご冥福を祈る。(合掌)

年次晩餐会及び懇親山行  
佐々木民秀

恒例の年次晩餐会は、十二月七日午後六時から会員五〇九名の出席のもと、新宿・京王プラザホテルに於いて開催。

今年度は欠席されるであろうと思われた新天皇陛下が、一会員としてご臨席され、真に光栄なことであった。

古野会長の挨拶の後、物故会員への黙祷、新永年会員顕彰、秩父宮記念山岳賞、新人会員の紹介等と進み、鏡開きに天皇陛下も和やかに飛び入れをなされ、日山協の八木原会長の乾杯の発声で開宴が始まった。



鏡開き

原 木 谷 垣  
下 陸 下  
前 会 長 小林  
古 野 会 長

秋田支部参加者三名が同テーブルとなり、同席の会員相互の歓談・交流を深めた。午後九時頃、陛下の退席後、恒例の賑やかな各支部の会員紹介が行われ、午後十時近くに散会した。

なお、午前中に行われた支部連絡会には鈴木裕子支部長が出席。午後一時からは記念講演や図書交換会が行われた。(会報「山」八九五号参照)

翌八日の懇親山行は、河口湖の北東に位置する三ツ峠山(開運山一七八五m)へ。早朝新宿から貸し切りバスで一行五十五名(例年より参加者は少ない)は、一路登山口のある三ツ峠バス停に向かうが、大型バスは乗り入れ出来ないとの事で、バス停から県道を歩き、登山道入り口へ。

十時四十五分出発。この先凸凹の狭い作業道を路肩に映く霜柱を観ながら進み、三ツ峠山荘に至る。ここから眺める快晴のもとに映える富士の雄姿は見事。多くの中国人が展望を楽しんでいた。すぐ先の広場で全員での記念写真撮影の後、木杵に碎石を固め終わったらばかりの階段を登り、午後一時頃、石碑や3等三角点のある見晴らし抜群の電波塔のある山頂についていた。

私は五十四年ぶりの山頂であったが、直下の岩壁(屏風岩)以外は殆ど思い出すことが出来なかった。

下山後、河口湖駅で一行と別れ、昨年も宿泊したプライン川口湖に宿泊。九日早朝、モルゲンロートに輝く富士を拝み、予約していたタクシーで忍野村の杓子山(二五九八m)へ向かう。不動温泉先の荒れた林道を走り、奥にある登山口まで乗り入れ。この先の林道は高座山の分岐まで続いていた。分岐からは稜線上の歩道となり、晴天のもと、樹間から富士や南アルプスの山々を望みながら最後の急登を経て、ベンチや鐘等のある3等三角点の山頂についた。三六〇度の眺望の広がる山頂からは、これまで登った富士五湖周辺の山々を始め、南アルプスの山々、富士の雄姿には特に圧倒された。この日の登山者は関東方面の方が多く、十

五名程。

下山は分岐から4等三角点のある高座山(一三〇四m)を経て、タクシートの待つ、鳥居地峠へ。(休憩含五時間程)中国人のごった返す忍野八海、新屋神社を観光し、夜遅く帰秋した。



杓子山山頂  
富士山の眺望が見事

参加者 佐々木民秀 今野昌雄  
鈴木裕子 講演会のみ 佐藤博

新年会 鈴木裕子

一月十八日、中通・大昌園で午後五時三十分から開催。

私からは新年のご挨拶と、昨年の六十周年記念事業協力への感謝を申し上げ、山仲間集いを楽しませようという挨拶をした。

若月会員の乾杯の発声で懇親は始まり、それぞれが個人山行や山情報、近頃の世間話、身近な出来事、そして今後の支部運営の在り方等を話し合うなど、楽しい時間を過ごし、午後八時頃、三浦昭男会員のお開きで解散した。

参加者 佐々木民秀 今野昌雄

柳田勇悦 若月寿 鈴木裕子  
堀井弘 佐藤博 高橋忠雄  
石川祐子 柴田勸 三浦眞六  
後藤浩二 佐藤英実 三浦昭男

会務報告

◎役員会

十一月二十八日 午後一時から泉コミセンで開催。

・六十周年記念祝賀会報告  
・役員改選について ・その他

出席者 鈴木裕子 堀井弘 鎌田倫夫  
佐藤博 川口廣志 石川祐子 柴田勸  
三浦眞六 佐々木長秀 安藤金栄  
熊谷光子 後藤浩二 藤田正義

◎役員会

十月十八日 午後二時から秋田市拠点センターアルベエ音楽交流室で開催。

・令和二年度の総会に提出する案件について ・役員改選について ・その他  
出席者 鈴木裕子 堀井弘 鎌田倫夫  
佐藤博 川口廣志 石川祐子 柴田勸  
三浦眞六 佐々木長秀 安藤金栄  
後藤浩二

◎事務局会議

一月九日午後一時から鈴木宅  
・役員打ち合わせ ・他

鈴木裕子 鎌田倫夫 石川祐子

会員情報

◎退会

長岡 幸則(令和元年十二月)